



序

建設産業の技術の向上と合理化のため、当社内に研究部門を設置したのは、戦時下の昭和19年であり、吾が国の施工業者の研究機関としては発足も古く、最も長い歴史を有するものといえる。

その後、戦後の復興と生産の革新にともない、建設技術自体もめざましい進歩をとげて来たが、当社の研究部門も、研究室、研究部、研究所と漸次規模内容を拡大充実させながら、技術進展の一翼をにない、研究業績をつみ重ねて今日に至っている。現在は所員数約40名、建設工学をはじめ、その周辺科学のそれぞれの専門の研究スタッフをも配置、小さいながら民間会社の研究施設としての一応の業務をはたし得る段階にまで整備されて来ているものと言えよう。

このような研究所の内容の整備と共に、その研究業績を蓄積発表するための研究所報の刊行は、早くから企図されていたものであったが、ここにようやくその第1号を発行するまでに至った。

内容その他の点については決してまだ満足とは言えないものと思われるが、建設技術の進歩と深化とのために何らかの資料ともなる部分があれば望外であり、ことに先学の方々から、各研究について御叱正をいただける事となれば幸いである。

清水建設株式会社 社長

清 水 康 雄

研究所報の発刊に当って

私はもと人間の幸福や安全を達成するには、先ず自然の脅威に打ち勝つことが大切だと思っていた。台風や地震や雷等これ等昔の物語りによく出てくる、人を苦しめるあらゆる責め道具は、皆人間が先祖代々困り抜いた自然の恐しいことがらであった。従って自然に打ち勝ちたいと云う考えが生れるのも当然のことではあるが、よく考えてみると、私達が自然の道に立ち塞がり、それを曲げたり変えたりすることは出来ないであろう。自然の法則は永久不変であって今日までのすべての賢者や聖者や政治家や学者の業績を調べ尽しても、おそらくそんなことを行ない得た人は一人もいないのであろう。のみならず、自然の中に生れた私達としては、そのような大それたことは考えるべきではなからう。ところで私達を生んだ自然は、諸々の脅威で私達を苦しめているとみえる反面、その同じ法則によって私達の生活を可能にしているのであり、その自然の法則を少しでも多く知り、またその利用法を一つでもよけいに発見することによって、より幸福により安全になるのである。このことはどんな立場の人々にでも、大なり小なり課せられた問題であろうが、私達研究者にとっては、特にその責任を感じずるものである。

研究室を出ない研究は無に等しいものである。また研究には、短時日に達成された幸運のものもあろうし、数年の労苦にもかかわらず、やっと一步を踏み出したものもあろう。しかしどの研究にも、おろそかに出来ない研究者の熱意と、研究の使命とを持っているものと信ずるものである。

研究所報の第1号の発刊をよこび、また所員の努力に感謝すると同時に、大方の諸先生・諸先輩の方々の御叱正と御指導を御願ひする次第である。

昭和37年4月記

清水建設研究所 所長

工学博士 久良知丑二郎